

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

頭山満思想集成

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com



頭山滿思想集成

頭山滿著

書肆心水



SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

本書は書肆心水既刊『頭山満言志録』と『頭山満直話集』を合冊化したものです

頭山満思想集成 目次

大西郷遺訓を読む 21

大西郷遺訓 23

頭山満講評 71

直話集 I 141

自己を語る 143
人物評 159
時評・訓話 177

直話集 II 191

一代回顧談 192

*

附録 頭山満先生 夢野久作著 338

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

詳細目次

大西郷遺訓を読む

大西郷遺訓（底本写真版）（23）

頭山満講評（71）

直話集 I

自己を語る

立雲という号（143）

俺は若い（143）

水泳ぎ（144）

俺の子供の時分（144）

青年期の東京生活（147）

洋服着た写真（148）

薪売り（149）

箒売り（150）

新聞の創刊（150）

山（152）

高場塾（153）

親（154）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

俺の病気 (157)
覚えて居る程の事は (158)

人物評

大西郷と自分 (159)
征韓論の真相 (162)
故山における大西郷 (163)
西行 (166)
中江兆民 (168)
金玉均 (169)
井上馨と鳥尾小弥太の人種改良議論 (170)
勝と岩倉 (171)
狂志士藤森天山 (172)
荒尾精には面白い話がある (173)
限の案内に犬 (176)

時評・訓話

アジアの殖民地 (177)
支那の出兵 (178)
支那の留学生 (178)
英米と償金 (180)
朝鮮統治 (180)
釜入りなんぞは至極面白かろう (180)
立派で危険な建物 (182)
成り金よりも成り人じゃ (183)
多勢は要らぬ、一人がいい (183)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

直話集Ⅱ 一代回顧談

- 鼻くえ猿 (184)
主とする処が違う (185)
金で割に合う位の命では安いものじゃ (186)
済まぬと思うだけがいくらか済む (187)
無人の境 (188)
人の一生 (188)
優しきものあって初めて敵なし (189)
三つの幸福 (189)
死んだら (190)
誠 (190)
神 (190)
はしがき (編者) (192)
これが自分の身の上話の初めてじゃ (193)
本を読む事は好きであった (193)
独りで淋しくない (193)
少時私の読書法 (194)
己れは泣かぬ児であった (194)
俺の碁将棋は真剣だと強くなる (195)
生まれながらのただくさ者 (196)
仙人修業の三年 (196)
平野国臣と近藤勇 (197)
平岡は行儀がよかった (198)
江藤新平の拳兵 (199)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

- 正直者、前原一誠 (199)
私の獄中生活 (200)
入獄中、母の訃音 (201)
南洲の師友、川口雪蓬 (203)
二度目の鹿兒島入り (205)
河野主一郎は起たなかつた (206)
大珍物の洋傘 (207)
気位は何時も大名じゃ (207)
大久保暗殺の報 (208)
土佐の民権婆さん (208)
東北無銭漫遊 (209)
仙台に三日 (210)
弘前で木戸御免 (210)
黒石町で演説で飯が食えた (210)
端座、漢学先生を凹ます (211)
腹と脚は誰にも劣けんじゃった (212)
越前へ無銭旅行 (213)
土佐で政談演説 (213)
福岡でも演説が流行 (214)
板垣は純忠の士 (214)
福陵新聞時代 (215)
玄洋社の青年訓練 (216)
河豚は食わさぬ (217)
薪買わんか (217)
来島が大野仁平を撲る (218)
会心の友、荒尾精 (218)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

- 荒尾内閣を見たかった (219)
偉人は五百年に一度降る (219)
後藤象二郎の太肚 (220)
条件付きの金は借りぬ (221)
天下人無きを歎ずるなかれ (221)
条約改正騒ぎ前後 (222)
小身の豪傑、小村寿太郎 (223)
小村の六升酒 (224)
小男の小村、暴魯を挫く (224)
傑僧雨天棒 (225)
鹿鳴館の馬鹿踊り連を糞溜めへ (225)
伊藤の智は横へ廻った (226)
何んでもやるぞ (226)
陸実は硬直 (226)
三浦の碁は腕力で行く (227)
風鈴均一碁で三浦の大敗 (227)
鳥尾訪問の失敗 (228)
鳥尾、井上を罵る (229)
「お前は許さん」と井上へ (230)
大晦日に廻る金 (231)
浜の家無銭寄留 (232)
副島の色男気取り (232)
佐々の「禿げ」 (233)
これが誠の道じゃろう (234)
安場の三ば (234)
「今日天下の急務は頭山が金を作る事です」 (236)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

- 私を漢の高祖に見立てた (236)
副島の胆伸ばし (237)
岡田の女将を驚かす (238)
年中正月、常二十才 (239)
頭山とは如何なる仁か? (239)
お妻の髪を切った話か? (240)
政府の腰抜けを追い分けて諷する (240)
鼻かけの英雄 (241)
従道、大西郷に叱らる (242)
大西郷、橋本左内に叱らる (243)
大西郷の師友、伊知地正治 (244)
大西郷の敬服した久坂玄瑞 (244)
木戸、大久保を罵る (245)
木戸、黒田を投げ倒す (247)
南洲の無頓着 (248)
高田が斬られた時の事か? (249)
番町屋敷の化物 (250)
頭山が吏党になった (250)
「頭山を斬る」という (250)
小身非力の豪傑、大井憲太郎 (251)
大井の臍 (252)
星も大井には閉口 (252)
星が私を議員に担ごうとした (252)
星を助けた (253)
剣難もぐり (253)
地税軽減問題 (254)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

- 松方総理を叱る (254)
伊藤は能く人才を用いた (255)
品川へ借金の相談 (256)
品川は善人じゃった (257)
丸裸で高利貸撃退 (258)
国民協会入党拒絶 (258)
大津事件の時 (259)
硬骨漢、児島惟謙 (260)
日露戦争、桂太郎 (260)
シルクハット問題 (261)
聴かなければ伊藤を斬る (262)
南洋視察費を飲む (262)
金の貸しっぷり、金子元二郎 (263)
炭坑を売った七十万円の行方か？ (264)
借金証書は正気歌の文句 (265)
支那へ入院したようじゃ (265)
美和も気の強い奴じゃ (266)
仏人リシャール来訪 (266)
大隈との会見 (267)
室蘭埋め立て願い (268)
頭山の嘘は公然 (269)
青木周蔵は変わり者 (269)
権兵衛大臣 (271)
孫文をどうする (271)
頼って出る化物 (272)
インド亡命客ボース (272)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

内田良平氏談

深夜の電話 (274)

インド人の神隠し (275)

明けっ放しの答弁 (277)

私の顔は潰れても…… (278)

首にして渡そうか！ (281) (以上内田良平談)

ボース氏の談を綜合して

頭山翁を訪問す (284)

日本退去の命令 (286)

インド人消えて無くなる (289)

新宿の中村屋へ (291)

病気が取り持った奇縁 (293)

日本政府の保護下に置かる (294)

上総かみづ一の宮の一ト夏 (295)

日印結婚 (296)

忠実なりし妻よ！ (297)

日本へ渡るまで (298)

虎口を脱れる (299)

香港の災厄 (301)

帰化日本人として (303) (以上ボース談)

三浦と大隈 (304)

天下の山県になり切れんのが惜しい (305)

山県は首でも取られると思うたのじゃろう (305)

安達謙蔵、白で碁を打て (305)

- 清浦はおとなしい (306)
総理級の人々 (306)
護憲三派運動と純正普選の時 (306)
私の握手の始め、熱海に三浦を見舞う (307)
立雲号の由来 (308)
宗演と禅問答 (309)
東宮御外遊時、二荒伯の誓文 (309)
杉浦は五重の塔 (309)
杉浦は真君子 (310)
俺は田中と同じ年に死ぬと言われた (310)
一遍で小便が出し切るか? (311)
遷宮式に二日断食 (311)
何よりも放蕩を慎む事じゃ (312)
御慶事式場でネクタイの借り物 (312)
震災の時 (312)
壺南坂の家が焼けた (313)
議員立候補の推薦状 (313)
誕生日が大袈裟でいささか迷惑 (314)
水戸家の昇爵時、宮相と会見 (315)
出雲大社へお詣り (316)
大本教と立雲翁 (316)
板垣伯の銅像 (317)
喜楽の女将、井上を凹ます (318)
女は面倒見てやる事じゃ (319)
犬養総理は貫録たつぶり (319)
議会のだらしなざ (320)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

- 神に仕える者の仕合わせ (320)
米国新聞記者の来訪記 (321)
早朝の明治神宮参拝 (323)
雲右衛門に素語り三席 (323)
宮崎滔天の浪花節 (324)
翁と遠山満との写真 (325)
木戸が差した兼定 (325)
私はあまり執着しない (326)
相撲取りは常陸と太刀 (326)
死んで生まれ変われ (326)
革丙將軍の遺物 (327)
飛行機は愉快々々 (327)
美人天上より落つ (328)
これは役に立たん方じゃ (329)
七日の断食——一食二十杯 (329)
胃潰瘍を三度やった (329)
顔が売れると世間へ通る (329)
親に似ぬ子、似た子 (330)
俺は欺かれん (330)
紙幣は袂へ無造作に (331)
石塔の頬かぶり (331)
ふりまらで大弓 (331)
私の化物退治 (332)
俺の書は頭山流じゃ (332)
私の印は貫いものばかり (334)
私の若返り法 (334)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

附録

頭山満先生

.....

夢野久作著

(338)

モウ一度四十才から出直したい！ (335)

俺は馬鹿運が強い (336)

敵を倒してそこに安全を求むる (336)

富相破りの貧乏生活じゃ (336)

外国の憲法論で日本を論ずる間違い (337)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

頭山満思想集成

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は、書肆心水既刊『頭山満言志録』と『頭山満直話集』の収録内容を合冊化した頭山満の語録である。合冊化にあたり判型を四六判からA5判に改変し、若干の補訂を施して新たな版とした。

表記について

一、『頭山満言志録』では底本どおりに旧仮名遣いを使用した。合冊化にあたり新仮名遣いに改めた。どの底本も漢字は旧字体表記であるが、本書では新字体で表記した（「龍」のみ例外として旧字体を使用）。送り仮名も現代風に加減按配し、読みやすいように読点を加えたところもある（「にさん」と読む「二三」を「二、三」とするなど）。踊り字の使用も現今一般に使用される「々」のみとした（一六八頁のみ例外）。西郷隆盛遺訓他の引用文もそのように表記を現代化した。が、一部の詩歌等の引用文において古い表記法のままのほうが望ましいと判断したところは底本表記のままとした。

一、表記現代化の一環として、現今一般に漢字表記しないものを仮名表記に変更した。現在では不使用傾向にある漢字の指示詞・副詞・当て字等、例えば次のようなものである。其、之、是、此、斯、亦、稍、猶、兎角、印度。

一、読み仮名ルビは、底本にあるものを選択的に採用し、適宜補足した。ママのルビ（原文のママの意）と、（ ）括りのルビ、および行内の（ ）括り二行割注は本書刊行所が参考までに附したものである。

一、その他、改行個所やレイアウト、鉤括弧の使い方など、適宜統一的に整理して表記した。

底本について

一、本書に収録した文章の底本は次の通り（本書の章立てと章題は本書刊行所によるものである）。

* 『頭山満言志録』収録分

大西郷遺訓を読む

SAMPLE
ShoshoShisui.com

立雲頭山満先生講評、鹿野雜賀博愛筆記（政教社編）、『改訂増補 大西郷遺訓』、政教社、昭和十六年十二月五日二十一日刊行（大正十四年三月十日初版刊行）の全文。「大西郷遺訓」の部分は写真版で収録した。

直話集Ⅰ「人物評」のうち「大西郷と自分」「征韓論の真相」「故山における大西郷」の三篇

頭山満述、吉田鞆明記、『英雄ヲ語ル』、時代社、昭和十七年九月十九日刊行。「西郷南洲」の章より（小見出しの文言は一部変更した）。

直話集Ⅰのうち右項三篇以外の全て

柴田徳次郎編、『頭山翁清話』、大民倶楽部、大正十二年五月十日五版刊行（大正十二年四月二十日初版刊行）および、同編者同書名（大民文庫版）、大民社出版部刊、昭和十五年十二月二十八日初版刊行。右記の二書との話題重複を避け、かつ、頭山満が自身を語っているもの、頭山満の考えがとりわけよく表れていると感じられるものを選択し抄録した。「自己を語る」「人物評」「時評・訓話」の括りは本書刊行所が設け、これにより談話の配列も按配した。小見出しの文言はこの括りとの兼ね合い等から変更したものである。昭和十五年刊の文庫版は増補改訂版であるが、その版より採用した談話は冒頭の二篇のみである。

＊『頭山満直話集』収録分

直話集Ⅱ 一代回顧談

頭山満翁直話、編者薄田斬雲筆録、『頭山満翁の真面目』、平凡社、昭和七年六月十八日刊行。その本篇全文（直話部分）を収録。同書併録の「最近頭山翁に対する諸家の感想」と編者のエッセイ「双柿舎から常盤松へ（逍遙翁から立雲翁へ）」は収録していない。

＊以上、『頭山満言志録』収録分と『頭山満直話集』収録分とで話題が重なるところがあるが、そのうち、ほとんど全て同じ話といえる場合には、『頭山満直話集』のほう（本書直話集Ⅱ）を省いた。

附録 頭山満先生（夢野久作著）

夢野久作著、西原和海編、『夢野久作著作集5』、葦書房、平成七年二月二十五日初版刊行所収、「頭山満先生」の全文（初出は『日本少年』昭和十一年一月号〜四月号の四回連載。これは夢野久作没年の作品である）。

附記

一、大正時代から昭和十年代にかけて頭山満の談話を編んだ書物は右記以外にも少なくないが、重複する話題が多く、また基本的に同じ本と言えるものもある。(例えば、『胆もつ玉』大正六年、『西郷南洲先生』昭和三年、『胆つ玉英雄風雲録』昭和四年、『重大国事の秘密を語る』昭和十一年、『胆つ玉』昭和十三年、『日本精神と腹』昭和十四年、『頭山翁警世百話』昭和十五年、『頭山満翁語録』昭和十八年、等。これら、および同名書物の別版においては、同じ談話でも細部の違いや時局を反映したようなニュアンスの違いが見られる)。右記『頭山満翁の真面目』編者の後年著書(昭和十二年刊)に、『頭山満翁の真面目』収録の直話をソースとして通俗読み物風に仕立てた『頭山満翁一代記』がある。

一、『大西郷遺訓』については、底本の「改定増補版凡例(本書二十二頁)」に記されているように、西郷隆盛の遺訓は初版と改訂増補版では別のものが収録・引用されている(初版は山路愛山編『南洲全集』の写出で、改訂増補版は荘内藩士の筆録原本の写出。本書において『大西郷遺訓』の底本は改訂増補版としたが、頭山満が講評した西郷隆盛の遺訓は山路愛山編『南洲全集』の写出であることから、西郷隆盛の遺訓については初版収録のそれを使用すべきかと検討したが、改訂増補版において頭山満の講評文に手が入っているともあり、西郷隆盛の遺訓も改訂増補版収録のものを使用した。本文中の誤植らしきもののうち、初版に照らした結果、全篇新組の改訂版における誤植と判断されたものは初版によって訂正した。

一、「直話集Ⅱ 一代回顧談」の筆録編者薄田斬雲の略歴等は次の通り。一八七七年生、一九五六年歿。本名貞敬。小説家、伝記作家。東京専門学校(早稲田大学前身)文学科選科卒。京成日報記者、早稲田大学出版部編集委員を経て、小説・戯曲等を自然主義的時流の中で発表。後年、歴史や国家社会への関心を深め、人物伝等を著す。

SAMPLE
Shosha.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE

大西郷遺訓を読む

Shoshi-Shinsui.com

改定増補版凡例

一、本書（（改訂増補版））刊行は巻末附記「大西郷遺訓と講評」に明らかなる如く大正十四年三月、初版刊行爾来版を重ねること廿三回に及べるものなるが今や我日本帝国は日支事変より大東亜戦争へと進展せる際、ここに内容に根本的改定増補（（改訂増補））を加え、非常時局の現代人士に必読の修養書として改めて刊行するものである。（初版との異同を根拠的に改定増補と感ぜらるるもの多）

一、本書初刊に引用したる南洲翁遺訓全文は、山路愛山編『南洲全集』より写出して立雲翁に提示したるものであったが、今改定版を出すに当り、莊内藩士の筆録にかかる原本に照応して全文をこれに改めた。

一、莊内本以外、南洲翁が子弟に訓話せられたるものや、遺訓として誦記するに足る数篇をも新たに添加した。

一、殊に南洲翁が自ら記して子弟に与えられた「死生の説」は、翁の人生觀の根義を示されたるものとして、不朽の文字であるので、新たに立雲翁の講評を請い、本書に附加して置いた。吉田松陰先生がその弟子品川弥二郎に与えられた「死生の説」を読んでも、維新勤皇志士の活動の根柢に横たわれる一大基本精神が、この「死生觀」に徹しありたることを思えば、鍋嶋論語と称せらるる『葉隠』が、武士道の根義を教えて「死ぬことと見つけたり」といえるも、故ある哉と思わしむるのである。

一、この書世に出でて既に十七年。年と共に世に愛読せらるるものは、大西郷の人格の千古に朽ちざるものあると、これを講ずる頭山立雲翁の至評の、適として肯綮に中るものあるが為である。遠く南洲翁の英魂に謝し、近く立雲翁のいよいよ健在ならんことを祈り、ここに改定増補版を世に問わんとするものである。

昭和十六年九月

大西郷遺訓

一、廟堂に立ちて大政を爲すは、天道を行ふものなれば、些とも私を挟みては濟まぬもの也。いかにも心を公平に操り正道を蹈み、廣く賢人を撰擧し、能く其の職に任ふる人を擧げて政柄を執らしむるは、即ち天意也。夫れ故眞に賢人と認る以上は、直に我か職を讓る程ならては叶はぬものぞ。故に何程國家に勳勞有るとも、其の職に任へぬ人を官

職を以て賞するは、善からぬことの第一也。官は其の人を撰びて之れを授け、功有る者には俸祿を以て賞し、之れを愛し置くものぞと申さるるに付き、然らば尙書仲虺之誥に、德懋んなるは官を懋んにし、功懋んなるは賞を懋んにすると之れ有り、徳と官と相ひ配し、功と賞と相ひ對するは此の義にて候ひしやと請問せしに、翁欣然として、其の通りぞと申されき。

一、賢人百官を總へ、政權一途に歸し、一格の國體

頭山満講評

立雲 頭山満翁講評
政教社 編

一、廟堂（朝廷、天下の大政を司る所）に立ちて大政を為すは、天道を行うものなれば、些とも私を挟みては済まぬもの也。いかにも心を公平に操り、正道を踏み、広く賢人を撰挙し、能くその職に任ずる人を挙げて、政柄（政治）を執らしむるは、即ち天意也。それ故真に賢人と認むる以上は、直ちに我が職を譲る程ならぬ叶わぬものぞ。故に何程国家に勲勞有るとも、その職に任せぬ人を、官職を以て賞するは、善からぬことの第一也。官はその人を撰びてこれを授け、功有る者には俸禄を以て賞し、これを愛し置くものと申さるるに付き、然らば尚書仲虺之誥に、徳懋（たか）なるは官を懋（たか）にし、功懋（たか）なるは賞を懋（たか）にするとこれ有り、徳と官と相配し、功と賞と相對するは、この義にて候いしやと請問せしに、翁欣然としてその通りぞと申されき。

（註）尚書仲虺之誥云々引用の原文は次の如くである。『尚書』は『書経』、仲虺は湯王の左相である。
仲虺之誥（尚書卷之三商書）

惟王不迹声色。不殖貨利。徳懋（たか）官。功懋（たか）賞。

用人惟己。改過不吝。克寬克仁。彰信兆民。

●立雲先生曰く—— 南洲翁に遺訓があるということは兼ねて耳にして居ったが、これを見るのは今が初めてである。一読して偉大なる翁の人格に面の当り接するような思いがする。ここに記されたのは、翁日常の片言隻句に過ぎまいが実に大したものじゃ。これだけのことが完全に行われていたら、上に明治天皇の在わすあり、今少し日本も立派なものになっていたであろうに、後年、政治家にその人を得ず、寔に残念なことが多かった。この中の一箇条でも、完全に行おうとすれば、容易ならぬ努力と決心と練磨とが要るのじゃ。然るにこの全部が南洲翁の人格であったかと思うと、実にその偉大さが思いやられる。能く翁の申さるるところを熟読翫味して、君国の為に赤誠を捧げなければならぬのじゃ。

「真に賢人と認むる以上は、直ちに我が職を譲る程ならでは、叶わぬものぞ」といわれているが、ここが肝腎のところじゃ。私の心があるから、何処までも自分の我を張ろうとしたり、自己の勢力を維持したりしようとするのじゃ。見玉え、近時非常時国難というのに、見るに忍びない政争や行詰りは皆、賢人と認むれば、何時でも我が職を譲ろうとする誠心がないからじゃ。

「官はその人を撰びてこれを授けよ」というて居られるが、翁の深い用意のほどが、この辺でも察せられるのじゃ。これに就いて、丁度思い出すことがある。西郷従道さんが、或る時のお話に、

「隆盛がよく申して居りましたが、大隈重信には、教育のことを授けてはならぬ。又、井上馨には、決して財政のことを任せてはならぬ、とかように申して居りました」

とのことじゃ。然るに大隈の一生を見ると、政治家というよりも教育家として有名になって居るし、又一方の井上は、明治の財政家として、自らも任じ、人も推すようになって居る。ここに南洲翁が、人物を見らるるに、独特の眼光を持って居らるることがわかるのじゃ。南洲翁の意中を付度して見たら、大隈は心に誠が足らぬ、誠の

足らない者に、天下風教の源であり、且つ人倫の大本を教うる、教育家の任務を託すべきではないと思われたものと察せられる。井上には、南洲翁が或る時、

「井上さん、あんたは三菱の番頭になられてはどうかでござす」

といわれたことがあるそうじゃ。井上は金を溜めることは知って居ても、公私の別あることを知らぬ。公私の別を知らぬ人間に、苟も皇室の御財政、延いては、国家財政の重任が委せらるるものではないというのが南洲翁の意中であつたように思う。

財政家を以つて任じている井上に、国家の財政を任じてはならぬといい、大教育家として許されている大限に、教育のことは委せられぬといわれた南洲翁の眼光は、遙かに俗眼を抜いているものがあるヨ。

一、賢人百官を総べ、政権一途に帰し、一格の国体定制無ければ、縦令人材を登用し、言路を開き衆説を容るるとも、取舎方向無く、事業雑駁にして成功有るべからず。昨日出でし命令の、今日忽ち引き易うると云う様なるも、皆統轄する所一ならずして、施政の方針一定せざるの致す所也。

◆立雲先生曰く—— 簡にして要を得、この上一言も加える必要はない。国の本体というものが、ちゃんと立って居らんければ、することなすこと、鴟の嘴と喰い違つてしまふのじゃ。自分がよくいうことじゃが、政治家というものは、善い事をして飯を食つとるものじゃ。どころが近ごろザラにある政治家という手合いは、善い事どころか、悪い事をして飯を食う者の方になつてしまつた。大へんな料簡違いじゃ。自分らが悪い事をするくらいなら、まだいいとしても、先に人がしておいた善い事までも、叩壊してしまふようなことをしよるテ。

政党内閣なんというものも、今では昔話になりかかっているが、一廉人民の為になるばしのごと吹聴して来たものだが、見玉え、誰が人民の為になることをしたか。皆んな党利党勢で、己れ等が党派の地盤ばかりしか考

ては居らぬ。それで後から内閣を取ったものは、必ず前の内閣のやったことを覆してしまひよる。そしてそれを一廉いちれんの手柄てばなしのごと吹聴ふいせんしよるテ。見られたものじゃありません。

南洲翁が「昨日出いでし命令めいれいの、今日忽たちまち引き易かうるといふ様なるも、皆統轄とくごうする所ところ一ひとならずして施政しせいの方針一定いちていしないからじゃ」といわれたのは、今日の政弊せいへいに見事に適中ていしゅうしよる。何もクドクドいふことはいらんから、この頃の大臣だいじんに、この一条いちじょうだけでも読よましてやるがよい。少しは赧あかい顔かほでもすりゃ、まだ脈いんのある方かたじゃ。これを読よんでも痛いたうも痒かゆうもないよな奴やつは、国の進展しんぜんの邪魔じゃまになるばかりじゃから、ドシンドシ引込ひきこましてしまふ外ほかはない。

一、政まつりごとの大体たいたいは文ぶんを興おこし、武ぶを振ふるい、農のうを励むますの三さんつに在あり。その他百般ひゃくぱんの事務じむは、皆この三つの物を助たすくるの具ぐ也なり。この三つの物の中に於おて、時ときに従したがい勢せいに因より、施行しんこう先後せんこうの順序じゆんじゆは有あれど、この三つの物を後あとにして、他ほかを先まにする更に無なし。

●立雲先生りつうんせんせい曰いわく——文武ぶんぶの兩道りやうだうといふことは、昔むかしから人がいつとるが、文武農ぶんぶのうの三道さんだうとしたところは、流石りうせきに南洲先生なんしゅうせんせいじゃ。智ち、仁に、勇ゆうの三徳さんとくに配くわしたところじゃのウ。百姓ひやくしやうは国の宝たからで、これを度外たかにおいて、国の政治せいざいが成なり立つものじゃやない。昔むかしから百姓ひやくしやうを粗末そまつにして榮えいえた政治家せいざいは一人もありません。

南洲翁なんしゅうおうの偉いいところは、口くちでいふばかりでなく、苟いさくも自分じぶんでいふことは、必ず自身みづかで実行じっこうしたところにあるのじゃ。常に徳とくを磨とぎ、武ぶを練ねり、用もちがなければ国くにへ帰かえって百姓ひやくしやうをして居ゐられた。知行ちかぎ合一ごういつの英雄いゆうゆうとはこのことじゃ。お上かみへの御奉公ごほうこうがすんだら、華族わかくでも、大官たいくわんでも、サッサと郷里きやうりへかえって、百姓ひやくしやうをすることじゃヨ。南洲翁なんしゅうおうは、いつも口癖くちくせのように「百姓ひやくしやうが一番正直せいしちでええ」といっていられたそうじゃ。

一、万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民その勤勞を氣の毒に思ふ様ならでは、政令は行われ難し。然るに草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱え、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也、今となりては戊辰の義戦も、偏に私を営みたる姿に成り行き、天下に対し、戦死者に対して面目無きぞとて、頻りに涙を催されける。

●立雲先生曰く—— この一項目は、特に政治家にとつての名教じゃ。「家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱え、蓄財を謀りなば……」とあるが、これを聞いては、穴に這入りたいどころか、鋭利な刀で腸をえぐられるような気がするものが多かるうて。従道侯も随分これで兄さんから叱りつけられたものと見える。自分が丁度この文をつくりの事を従道さんについて、責めつけたことがある。その時従道さんは頭を下げて、黙って聞いて居られたが、今から思えば、丁度兄さんから叱られてでもいるように感じられたものだろう。

従道さんばかりではない。近ごろの政治家で、堂々たる邸宅を飾らぬものが何処にあるか。それで思い出すのは長州の白井小介というお爺さんじゃ。このお爺さん、奇兵隊生残りの豪傑で、山県でも三浦でも、小僧のように叱り飛ばしたものだ。山県なぞが、先輩の高杉東行（伴）や久阪（松崎）玄瑞のことを「高杉がどうしたの、久阪がどうの」と呼び捨てに話をしていると、白井は真赤になって怒鳴りつける。

「貴様らが何ばし出来るごと、大きな口の利きようをするな。高杉先生や、久阪先生が死んでいられるからいいようなもの、もし先生がたが生きて居られたら、末席にも出られたものじゃないぞ。貴様らとは元来人間の段が違うものじゃ。先生らのお蔭でからに少しばかり頭を持ち上げたからといって、偉そうに高杉が久阪がなどと、呼び捨てにするとは怪しからぬ不心得じゃ。以後は氣をつけて、高杉先生、久阪先生と、チャント先生をつけて話をしろ。小僧の癖をして、失礼な口の利きかたをするなよ」

とひどくきめつけたものじゃ。

その後、山県が立派な新邸を建築したと聞いた白井は、黙っては居らぬ。早速長州から飛び出して来て、綺麗に磨き立てた新邸へ下駄ばきのままで躍り込んだものじゃ。すると山県の女房が驚いて、

「白井さん、いくら何といっても、それはあんまり酷いではありませんか」

少々気色ばんで詰めよせると、白井はムツとしたと見えて、細君の顔を下駄の先で蹴りあげたもんだ。そして
 いうには、

「女なんぞの知ったこっちゃない。訳の分らんことをいうな。山県が少しばかり偉くなったからといって、こんな御殿のような家を建てるとは、何というこっちゃ。久阪先生や、高杉先生が、命を捨てて働かれたればこそ、今日のような身分にもなれたのじゃ。それを早や忘れてしもうてからに、お城のような家を建てて、殿様気取りをするとは、何という不心得なことじゃ。どだい考えが間違うてしもうとる。馬鹿者奴がこういう家に来るには、下駄ばきで通って丁度よい……」

乱暴な爺さんもあったもんじゃが、山県もこれには困つてしまい、こういう爺さんに来られては始末が悪いと思つたかして、幾らかの小遣を渡して、（ちやうそ）勿々長州へ追いかえたという話がある。遣り方は少々乱暴じゃが、一面の真理があるテ。南洲翁の「万民の上に位するもの、己れを慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して、人民の標準となり、下民その勤勞を氣の毒に思う様ならでは政令は行われ難し」と喝破して居られるのは、この辺のことを戒められたのであらう。

一、或る時、幾歴辛酸志始堅、丈夫玉碎愧飄全、一家遺事人知否、不為兒孫買美田、（幾歴たひか辛酸を離へん、志始めてか辛酸を離へん、玉碎し、愧飄し、丈夫玉碎し、一家の遺事人知るや否や、兒孫の為に美田を買わず。）との七絶を示されて、もしこの言に違（ちが）いなば西郷は言行反（ちが）したるとて見限られよと申されける。

●立雲先生曰く——この詩は、大久保利通が堂々たる西洋館の新邸を作ったときに、南洲翁がこれを諷せられたものであるとも聞いている。いずれにしても、「児孫の為に美田を買わず」とは、千古の名訓じゃ。誰でも、功成り名遂げた暁には、美しい衣を着け旨いものを食ひ、立派な邸宅に住みたいというのが人情じゃ。あの人には偉い人にはいわるるくらいの人傑でも、とかくこの辺の道には迷いたがるものじゃテ。

こういう話がある。大久保甲東(逆利)がある時、イギリスに軍刀を注文して、金色燦爛たるえらい立派なものをこしらえた。それが評判になって、つい南洲翁の耳にはいった。

一日、翁はブラリと大久保を訪われた。話の序でに翁がいわるるには、

「大久保どん、おはんこの頃えらい立派な軍刀をこしらえさっしやったということじゃが、どれでござすか」

大久保は床の間に飾ってあったのをとって見せる。成程ピカピカしていて、大そうなものじゃ。つくづくと見とれていた西郷は、何と思ったか、

「おはん、これを一寸おいどんに貸して呉れんか」との相談である。大久保も、妙なことをいい出しおったなとは思ったが、外ならぬ西郷の頼みだ、厭だともいえないから貸してやったもんだ。ところが西郷がそれを借用に及んで、持ち帰ったはよいが、さて何時まで経っても返さない。フト思い出して見ると随分長くなる。始めの間は大久保も、西郷のことだからその中に返すだろうと思って、催促するのもおかしな話だから、そのままにしていると、待てども待てども音沙汰がない。大礼服などを着用する場合には差し当り必要に追られたりするで、そうそう黙っておれなくなり、或る時西郷に、

「おはんが借りて行ったあの軍刀は、早く返してくれんと、時々困ることがあるでのウ……」

思い切って催促した。すると西郷は、

「ああ、あれでござすか……」

忘れてしまつて居つたといった調子で、

「あれは書生どもが来て、あんまり綺麗じゃ綺麗じゃというて、欲しそうな顔をするもんじゃから、いつぞや書生に呉れてしまつた」

と平気なものである。あの六ヶしやの大久保のことだから、真赤になつて怒つたというが、ここが南洲翁の考えの深いところじゃ。翁の心中を割つて話をするならば大久保甲東ともいわれるものが、子供だましのような軍刀をこしらえて、金ピカを鼻にかけるのは見つともない話じゃないか。殊に軍刀なら、イギリスあたりには註文しなくても、日本の水で磨ぎ澄ました名刀がいくらもある。そんなことをしては人に笑われるぞ。塵溜にでも捨てるか、書生にでも呉れてやれ、と口でいえばそうなるころを、南洲翁は黙々として実行されたのじゃろう。

南洲翁は、自分でいったことは必ず実行して居られる。実行の出来ないことは、始めからいわれないのじゃ。

「もしこの言に違いなば西郷は言行相反したると見限られよ」といわれているのは、一語千鈞の重みがある。

近頃では「見限られる」ぐらいのことでは、酒蛙々々としとる。法律に触れても、性根が直らんくらいだから、始末がわるい。

一、人材を採用するに、君子小人の弁（分別）、酷に過ぐる時は、却て害を引き起すもの也。その故は、開闢以来、世上一般、十に七、八は小人なれば、能く小人の情を察し、その長所を取り、これを小職に用い、その材芸を尽さしむる也。東湖先生申されしは、小人程才芸有りて用便なれば、用いざればならぬもの也。去りとて長官に居え、重職を授くれれば、必ず那家を覆すものゆえ、決して上には立てられぬものぞと也。

●立雲先生曰く—— 小人が十の七、八であるところで見ると、その頃までは、まだ十の二、三は正直者が

居ったと見えるのウ。この節では、十の十まで小人ばかりで、西を見ても東を見ても、一山百文で夜店のさらし物になるようなものばかりじゃ。十の十どころか、十の十二、十三と却かえってはみ出しとるかも知れんテ。「開闢かいびく以来」が面白いネ。小人は小人で、ちゃんと使って行かねばならんというのは親切なものじゃ。馬鹿ばかと鉄てつは使いようで切れるというからネ。

藤田東湖先生の話が出とるが、南洲翁も東湖先生には敬服して居られたようじゃのウ。維新の元勳とか何とかいうので、御一新の後、西郷が大立物として持て囃はされて、一世の尊敬を受けられるようになってから、よく人に、

「今俺が少しばかりの手柄があつたからというて、皆にチャホヤされるのは、冷汗が出るような気がする。もし東湖先生や、久阪玄瑞（玄）その他の諸先輩が生きて居られたなら、到底、その末席にも出られた訳のものじゃない。それをああいう先輩方が、早く死なれた為に、俺のようなものが豪えいそうにいわれるのは、恥ちずかしゅうてならぬ」と話されたそうじゃ。あれ程の地位にありながら、チットも自分を高ぶろうとしないのは、流石に南洲翁じゃ。この頃では、自分で謙遜するどころか、他人の功績を打ち潰してしもうて、自分独りでのさばり出ようとしよる。

一、事大小と無く、正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用うべからず。人多くは事の指支（一）うる時に臨み、作略さくろくを用て一旦その指支（二）を通せば、跡は時宜次第工夫の出来る様に思えども、作略（三）の煩わづらい屹度（四）生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以てこれを行えば、目前には迂遠なる様なれども、先に行けば、成功は早きもの也。

●立雲先生曰く——この心が人を動かし、国を興す基となるのじゃ。実に立派なものじゃ。この心で御一新後の八十年を一貫していたならば、日の丸の旗を押し出しとるだけの実は拳がったろうに、小人、国を誤まるの

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
直話集 I
Snoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



観樹三浦梧楼（70 歳）と立雲頭山満（61 歳）

SAMP
Shosh
ai.com

自己を語る

立雲という号

俺は、人などを送ったり、迎えたりせぬ奴じゃ。

しかし、三浦(三浦)が朝鮮で、王妃事件(王妃事件)の為に牢に入れられるやらして、帰って来ると云うから、あの時はどこまでか迎いに行った。

佐々友房や、井上角五郎やら一所であったが、三浦は俺の行った事を特に悦んだ。

その後いつであったか。俺の号の立雲というのを、どう云うワケかときくから、ワケと云う程のことはない、唯ただ、いつも「フリ○○」で、雲の上に立って居るつもりじゃと云ったら、三浦が、「フリ○○」は面白い、「フリ○○」はよいと云ってヒドク感心した。

俺は若い

俺は若い。

まだ赤ん坊じゃ。

赤ん坊に、白髯の生えたようなものじゃ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

水泳ぎ

水泳ぎは、子供の時から好きじゃった、少々の年長者よりは、能く無鉄砲な泳ぎをした。

十一の時、近所の十三位の児と一所に浜に泳ぎに行った。俺は先に飛び込んで、跳ね廻ったが、年上の児は泳ぎを知らんと云うので這入らぬ。

よし、俺が泳がせてやる、と云って無理に連れ込んだ、処が実は自分の泳ぎが出来て居ないくせに、年上の大きな者に抱き付かれて居るものじゃから、いくら力を出して泳いでも不可ぬ。

二人とも溺れ死にそうになった。これはと思つて連れの手を離して、やっと俺一人上った。

上ったものの連れを見ると、だんだん溺れ死にそうになって居る。これはいかぬ、俺が無理に引込んで置いて、殺しては、俺もどうせ死なねばならぬ、どうせ死ぬなら一所に溺れて死のう。

即座に決心がついたから、又飛び込んだ、そして其奴の手を取つて、背にかついで、めくら滅法にバタツいた。

無我夢中でやった、すると、ひょいと蹴った足が砂に付いた、それに元氣付いて、やっと浜に辿りついた。

その時、少しでも躊躇したら、二人とも助からなかつたね。

俺の子供の時分

俺の子供の時分は、不可ぬ奴じゃった。親の言う事も聞かねば、兄なぞをいじめつける様な始末で、殆んど我がままの仕放題じゃった。

大抵な嫌われ者じゃった。しかし親父だけは大変俺を可愛がって、言うてもとても聞かぬから、やる様にさして置けと云ってほおって居いた。

まだ士族とか云って、威張つて居る時代で、西瓜の切り売りなどを買って食うのは乞食かなどのように云うて

居った。それを俺が是非食うと云う、許さなければ黙って搦んで食うと云う風じゃから仕方なしに買食いを許した。

菓子でも、菓子屋の前に立って、食いたいと思うと誰が何と云っても搦んで食った。内でも手の付け様がないから、通帳を遣ってね、俺が食っただけ付けて置いてくれと云って菓子屋にやってあった。

嫌な事と来たら、見向きもしなかった。しかし学問は兄なぞにも、やらにゃ不可ぬ位に云って俺が勧めた位で、自分の気に入った学問は可成りよく覚えた。

七つの時に、親父や兄なぞと一緒に、水士烈伝の講談を聞きに行った。水戸の浪士が、桜田門外で井伊大老を討つ講談で、非常に面白かった。家に帰って丁度聞いた通り一字一句も違わさずやった処が、親父なども驚いて居った。

好きな書物はよく読んだ。記憶力は良かった様じゃ。十二、三位までは殆んど我がまま一点張りで、人の物は我が物、我が物は我が物と云った風じゃった。

十四の時に『論語』を読みよったら、子曰く「道に志して悪衣悪食を恥ずる者は、未だ与に議するに足らず」とか云う事が書いてあった。これはひどく頭に響いた。

それから我がままをがらりやめた。自分の物も人にくれるようと決めた。悪衣悪食宗に宗旨代えした。それ迄は甘い物でも、家内中のを一人で取上げて食うと云う風じゃったが、一切反対にやることにした。

雪の降って積ってる中に、頰杖どもついて、雪の中に寝転んで、他所で琴を弾いて居るのなぞ聞いて居った事もあった。

十五、六まで、滝田と云う学者の塾に通った。その時の年長者仲間栗野（子爵）平賀（大坂の義美博士）なども居た。栗野は俺よりは四つ位年長で、二十位じゃったろう。仲々学問がよく出来て居った。

俺はしかし塾中で、皆から憎まれ者じゃった。棒にも箸にもかからぬ様に云われて居た。それで俺も、どうせ

悪く云うなら、うんと悪く云わせてやろうと思つて、出来るだけ憎まるる事をやつた。

俺が一番年少ではあるし、仕たい放題をやつた。手水鉢ちみづはちに小便を垂れ込んで置いて、それで以て手を洗わせて、後からあれは小便じゃつたと云つたり、門の上に登つて居つて、下通る奴に頂あたまから小便引っかけたりした。塾中の者が団結して、俺を畳伏せにやろうと云う事をきめた。いよいよ今夜やると云う晩になったから、どうせやられるには違わぬ、しかしやられても構わぬから、あつと云う程皆の度胆を抜いてやろうと思つて、五寸位の、良く切れる短刀を、少し鯉口を切つて側そばに置いて寝たふりをして居た。しかしその晩は畳伏せに來なかつた。来て居つたらやられて居つたかも知れぬ。実は寝たふりの心算ツセキが本寝入りして居つたようじゃ。遂々とうとう一度もやられずに済んだ。

その次には亀井の塾に行つた。亀井は紀十郎と云うて四十位の人であつた。俺が十七位じゃつたが、亀井とは俺が十四位から、碁の友達じゃつた。実は、初めは碁も亀井に教わつたが、暫しばらくして居る中うちに同じ位になり、後には俺の方が強くなつた。年は親と子程違つて居つたが、亀井はよく俺の家に碁打に遊びに見えた。

処が、亀井先生、財政の都合上、役人になることになつた。丁度その時の、熊本の県令安岡というのが亀井の門弟じゃつた関係から、熊本県庁の役人になつて熊本に行く事になつた。

或る日熊本から、亀井先生、俺の家に来て、俺に役人にならぬか、実は県令の安岡とも話を決めて來た、何をすると仕事は決めて居らぬが、県令も非常に賛成で、亀井も碁打やら何やら、友達が出來て大変都合じゃからと云うのじゃつた。

その頃が、士族をやめて、何か働かねばならぬという、帰農帰商などをやかましく云う時分じゃつたから、親達も至極賛成じゃつたので、俺さえその気ならすぐにも連れて行きたがつて居た。

しかし、俺は役人する為に学問して居る訳ではなし、学問の御相手ならするけれ共ども、役人の相手は辞しやつた。処がその年、神風連しんぷうれんが起つて（劇作）、鎮台と県庁を夜襲して、種田少将と、安岡県令とを伐つた。俺が役人になつ

て居れば、当分安岡県令の内に遊んで居る事になって居たそじゃから、俺の首もやられて居たに違いない、もちっとのことで首をいく処じゃった。

その頃からずっと学問して居たら、博士位になって居ったかも知れん。記憶はよかったから、その当時は先生の読んだ処を暗記さえして居ればいいので、訳はなかった。先生の声色までそっくり覚えて居たからね。やらすればなかなかよかところやりおった。しかしこれもやらす、役人にも縁はあったがならなかった。

青年期の東京生活

自分が丁度二十六、七の頃、牛込の佐内坂に、元氣な連中と六、七人で居った。初めの内は着物を作ってやり、布団を買ってやり、洋傘を求めてやるして居ったが、何時の間にかそんな物は忽ち無くして仕舞う。後には冬は布団無し、夏は蚊帳なしで、雨や雪にでも降られようものなら、着類をうんと濡して置いて、内に帰って全然抜き捨てて、素裸になって押し入れに這入る、そして襦を締切って「こいつは暖かい」位の調子でいつも襦が布団じゃった。



25 歳頃の肖像

飯は近所の弁当屋から取寄せて食って居ったが、その食料が又一、二ヶ月位は滞りよった。或る時自分等が二階の押し入れに寝て居ると、飯屋の女中が掛け取りにやって来て、「お払いは如何ですかねー」と云う声が如何にも可笑しいので二階から「くすくす」笑った。処が声がすると思うものだから二階の梯子に上って来て、また「御払いは如何ですかねー」と云うた、その途端に、大きな男が幾人も押し入れから真裸で飛び出した。驚くのも無理はない、女中は一散に駆け戻った様な奇談もあった。

当時はまだ、郷里に帰るにも汽車はなし、船位で行き来して居っ

た。急な用事が出来て、福岡に帰らねばならぬ事になったがさて旅費が無い、で進藤（玄洋社長喜平太氏）とも相談して誰か持つては居るまいか、松田正久は如何じゃろう、と云う事になって松田の処にやって行った。

松田の云うには「貴兄達の様な身成では金貸も貸しますまい、丁度、私が郷里へ帰る旅費を用意して居るから、これを御持ち下さい」と云つて貸してくれた。後ですぐ返しはしたが、金銭に淡い松田の旅費で郷里に帰つたなぞは可笑な話で、余程自分達の風彩が、變つて居ると見たらしい。

その頃は今日の様に、衣食の為、早く地位に有り付こうなどという若い者は居なかつた時代で、玄洋社の者は道の為、事をやるという段に至ると、先を争つたものだった。身を殺して働いた者でもあると羨んでやまぬ、と云う有様だった。旅行するでも金なぞ持った事はない、何時も無銭旅行じゃった。行きたければ二十里でも、三十里でも行く、食う物があれば幾何でも食うが、無いとなると二日でも、三日でも平気で断食した。

洋服着た写真

俺の洋服着た写真か、それは今から四十年位前、平岡浩太郎が作ってくれた。

平岡が、ボロ洋服着して、底の破れた様な靴をはいて、俺と一所に浅草に行く時分じゃった。

「君に是非洋服を着せて写真をとらしたい」と云つて、その頃、掛けで作ってくれる鴛塚とか云う洋服屋に連れて行つた。

俺が、「せつかく作ってくれるなら一番いい奴を作ってくれ」と云つて作らした。

そして、平岡が靴下まではかせられて、「君には閉口」と云つて、逃げ出した。

俺に、せつかくすすむるなら何も彼も序ついでにしてくれと云つとるものじゃから、帽子から靴から靴下まで揃えてさせてくれた。

平岡も自分で云い出したものの、あまりと思つたと見えて、「もう俺ものさむ」とこいて逃げ出した。写真はそ

の時のじゃ。

そして、平岡と一所に道を歩いて居った処が風が吹いて来て、帽子を泥溜りに吹き飛ばしてしまった。それから、帽子無しで暫く歩いて居たら、好かぬ奴じゃったが、友人の大庭広と云う、けちな奴が、「東京は変な者が居る処じゃが、そんな立派な洋服着て、帽子かぶらんで歩いとるのは可笑しい」とこいて、自分で買って来て、寄附した。

この洋服屋じゃ、来島(くみしま)(恒喜氏)に、今度は俺が洋服を作つてやったのは、黒のモーニングとか云う奴じゃった。来島が、「これは善過ぎます、もつとおろすかな(悪い)」とでよございませう」とか遠慮した事があつた、今でも有る。(この洋服は、大隈首相被服事件で来島の死を飾る暗殺者となつたもの(後掲「一代別荘」)の底本「頭山彌次郎の真面目」中に言及がある。本書では寓意重視のためその部分(後掲)を省いた。)

薪売り

玄洋社の若者中で、福岡の田舎の平尾村に山林を払下げて、薪を伐つて働いて居った事がある。伐るだけでは不可ぬ、福岡の市に売りに行こうと云う事にきめた。一人非常に剽軽(ひょうけい)な奴が居つて、なかなかよくしゃべる。それから俺が、貴様と一所に荷を担いで売りに行こうと云うので、六尺の尖り棒に薪を二輪突掛けて福岡にやつて行った。

処が黙つてあるいても仲々買手が無い、何とか云つてふれて廻る必要がある。「おい貴様何とかふれぬか」と云つたが、日頃はしゃべる奴じゃがこの時許り(よこ)は一向声も出し得ないで、顔を赤くして居る。それから俺が「貴様荷を担いでついて来い」と云うて其奴(そのやつ)に担がせて置いて、「薪はいらぬか薪! 薪はいらぬか薪! 好く燃ゆる薪」と云つて、俺がおらんで(高声に呼ぶの意)あるいた。遂々触れ廻つて居る中に買手があつた。

何でも廿四銭かに売れたで、その金で牛肉一斤買って、内に待つて居る皆の者と食おうと云うので土産にした。一斤の値段は確かに八銭じゃつたと覚えて居る。

余り以前に新聞をやった事がある。『福陵新聞』と云うのじゃった。今は杉山、大原等がやって居る『九州日報』じゃ。

その時の事で、金が二万もあれば新聞がやれるというから、その位な金なら作ろうと云う事で思い立った。或る奴が「あの連中で新聞が出来たら、太陽が西から出る」と云うたで、「よしそれでは太陽を西から出して見せよう」と云う事でやり初めた。

福岡の重立った者には皆賛成せられよと云って、賛成させた。そして賛成するなら寄附金出せと云って大抵此方から割当てた。小野良介などは郡長して居ったから、五十円出せと云ったら、月給全部出しても五十円しか無いから、十円にして呉れと云うから、貴様が十円出す様では以下の者は殆んど出さぬじゃないか、月給取つてるものは月給位は出さじや、第一賛成するからには新聞が出せねばならぬじゃないか、新聞が出せる為には五十円の月給位は全部出さじや、新聞を出さぬ位なら十円は愚か、一銭一厘でも出しては愚でないか、又俺共も新聞出さぬ位なら此方から呉れてやりはするとも、貴様達から貰うものか、と云ったら、尚能く相談して見ますと云って遂々五十円出した。

他の者も夫々加勢する、反対党までも寄附金した、黒田家にも二千円申込んだ、その使には俺が出て来た、家老に会って訳を話して出して貰った。

後で家老が人に向って「あの人は寄附金を貰いに御座ったとじゃろうか、貰って遣りに御座ったとじゃろうか、どうも貰って遣りに見えた様じゃ」と云ったとか云う事じゃった。

そう云う風で二万の金は集まった。新聞は出た。主筆なぞも、日本一の文豪じゃなくては備わぬと云うので月給等も百円以下のは置かぬと決めて居った。しかしその月給は仲々渡らなかつた様じゃ。その後も仲々骨が折れたらしいが、俺は造ることはしたが後は一向無頓着の方で。しかし、とにかく、太陽を西から出した次第じゃ。

その頃は物も安かつたが、今は仲々そんな事では行くまい。殊に余り名も知れぬ奴の銅像はいくらも樹つが、

勝海舟なぞの銅像は誰も樹て手が無い様に、俗世に媚びる雑誌だと売行きも多かるうが、貴様達の様に生一本で行くには一寸骨じゃろう。しかしそれでやり抜けばこれに越した事はない。俗に負けてはならぬ。開祖の坊主の氣でしつかりやり抜け。雑誌位は大志の一端に過ぎない小事ではあるうが、やり掛けた事にはそれだけの結末を付けると云う事は、大小に論なく大事な事じゃ。

山

上州の磯部温泉に行つて来た。まだあすこは変な手が余り行かぬから、悪ずれせず極く静かで、養生には至極好かつた、大分身体の具合もよい様じゃ。

旅行は一体よい様な氣がするね、飯なども余計に食える。妙義山にも登つて見た。仲々景色のいい山じゃ、処々金の鎖を捕えて上つたり、又これに下つて降りたりする処がある。東京辺りからもわざわざ登山に出掛ける者が大変ある様じゃね、秋は紅葉が見事じゃから。俺は若い時分から、山登りはよくやった。霧島山になんぞ、石を担いで登つた事がある。久田全と云うた人と二人で、麓から石を担いで登る事にしようとするので、久田が俺のよりは小さい石を担いで居つたが途中で捨てた様じゃ。

俺だけは頂上まで担ぎ上げた。俺の足は細いから、軽くて山登りなぞには向いて居るらしい、人程骨が折れぬ様じゃ、足軽で足が軽かつたんだねー。

足軽と云うと、その頃の元氣な友人は、皆足軽じゃつたようじゃ。箱田六輔、平岡浩太郎、進藤喜平太など何れもそうじゃが、平野国臣なども足軽じゃねー。

俺の家か。今の頭山の家は十八石じゃつた、まあ土分の中じゃつた。俺の生家の筒井と云うのは、百石じゃつた。俺の母が頭山家から来て居つて、頭山の家が死に絶えたものだから、俺が養子にやられたわけじゃ。

その頃は帰農帰商の盛んに唱えられた時分です。士族も何かやらぬと食つて行けぬ、竹細工でも、畳のへりはり

でもやらぬと不可ぬ時じゃった。頭山の隠居と云うのが非常にそう云う細工事の上手な人で、よく俺の生家にも教えに来た。兄なぞは習ったが、俺は一向出来なかつた。

どうも器用な事が一体出来ぬ質で、芋売り位はやれるかも知れぬ、一つ芋売りにでも出掛けて見ようと思ったけれど、内の者がとめるからとうとうやめた。

しかしとても俺は飯食う様な働きがない、商人にはなれず、役人にはなれず、小使にも使ってくれてはなし、これは一つ飯食う事をやめにして、仙人にでもなろうときめて、平尾山（福岡の附近）に這入った。

十八位じゃったと思う、面倒臭ければ食わぬ、至極呑気じゃった。或る時、極く仲の好い友人の、多久甚太郎と云う医者が尋ねて来た。

せつかく来てくれたから、何か御馳走をしようと思つた。しかし何も見当らぬ。裏の畑から、豆をサヤなりにかがつて来て、これを鍋に入れて煮る事にした、処が、味噌もなければ、醤油もない。梅干の食いさしと、ゴマ塩の残りがあつた。これを水で流し込んで味をつけた。

「まあせつかくじゃから、これでも食つて行つてくれと云つたら」、多久が、「イクラ何でもこれは私には食べられません」と云つて食わなかつた。一寸他人には俺の附合はやれなかつた。貴様共ならついて来たろうがね。

この山と云うのは、実は俺の家の山で、そこには小さい山番小屋があつた。それに俺が這入つたのじゃつた、とても始末に了えなかつたものじゃ。

その俺が、頭山の養子になつたと云うものだから、「あれでも養子か」と云つて皆笑つて居つた。

高場塾

処が少し眼を病んだ。それから人參畑の高場乱子の許に行つた。高場と云うのは眼医者じゃつたから。するとこの高場の塾には、大勢乱暴な若者が集つて居つた。俺も仲間に入ろうと思つて高場に話したら、

「やめたがいい、人を叩き倒して監獄に行く位は、何とも思つて居ない者許りじゃから、とても無難には行けぬ、袋叩に位すぐ逢わされる」

と云つてとめた。しかしそれは面白いと思つて、俺も仲間に入れてくれと云つて、やつて行つた。

丁度大勢集つて、何か煮て居る処であつたから、俺は黙つて一番に箸を取つて食い始めた。変な面をして皆俺を見て居つた。そこへ高場が心配して見えた。処が俺が矢鱈に叩かれもせず食つとるものじゃから、「あなたは如何した結構な事じゃろうかい、御馳走になつて」と云つて安心して歸つて行つた。

その時の連中共は、『十八史略』位を高場先生に教わつて居た。俺が行つたものじゃから、イジメてやろうと思つて『左伝』の論講をやろうと云い出した。俺は腹の内、此奴等に『左伝』がやれるか、と笑つて居た。そして一番に俺にさしつけたから、読んで見せたら、張り合ひが失せてやめた。

しかしどうかして腹を立てさしてやろうと思つて、一番元氣な奴が先生に質問に行つて居る跡に、其奴の机の処に据つて、机の中から角まで見散したままにして居つた。其奴が歸つて、変な眼をして立つたが、「その机は俺のだ、何故そこに居るか」と云う、貴様の事は承知だったが、留守だから俺が坐つて居た、貴様が来ればのく考えじやつたと云つたらぶすぶす云いながら座についた。

そして『十八史略』を読み初めた。それから俺が側から、それは違う、こう読むんだ、それも間違つとる、こゝう云う意味だ、と云う風に、面悪い程直してやつた。其奴齒をぎしぎしならして俺の顔を見て居たが、やがて書物を伏せてどうするかと思つたら、こゝう云う風にして、何時も教えて貰うと、進みが非常に速い、これからどうかそう云う風にして貰いたいと云つて、遂々叩き掛りもせなかつた。

親

俺の父は、筒井亀策と云つた。書画が非常に好きで、床の間や楣間許りでなく、部屋中一面に、壁にまで書画



31 歳頃の肖像

を掛けて一日楽しんで居た。
兄弟中で、俺の骨格が一番よく父に似て居った。頑丈な体格じゃった、槍を使った様じゃ。何でも、槍は目録位は取っておった様じゃ。

亡くなった時が、七十六歳じゃった。余り病気などはした事がなかった、元気なものであった。俺が東京に居った。福岡から、父が病気になるのと云う知らせがあったから、急いで帰って行った。

床に就いて居ったがね、俺を見て、「外に連れて行け、外に連れて行け」と云う。床から起して、家の外に連れ出せ、床の上なにかじゃ死なぬと云う事じゃね。

それから、俺が静かに抱き上げて、床を離れた処がそのまま息が絶えた、俺の膝に抱かれたまま亡くなった。丁度俺が三十六の年じゃった。

母は、俺が山口の獄に居る中に亡くなった、俺が二十二、三じゃね。俺の心配をかけたのも幾分あったろうが、病が因であった、胃癌に罹って居った。

骨格は、余り大きい方でもなかった。中位のものであった。自分の身（ふなり）扮とか、食物、遊山など云う事は、少しも思わなかった。貞女慈母としては立派なものであったと思う。

ただ専心一意に、夫に仕え、子を愛した。僅か百石取りじゃったから、仲々家計も豊かではない。筑前の三斗四升俵で、百石と云うのは、二百俵位しかない、その中から又十八俵か中で引ける、これを今の金にしたら、月に、四十円位のものじゃろう。

これで一家七人の糊口を凌いで、一面社会の体面も立

てて行かねばならないのじゃから、骨の折れ方も一通りではなかった様じゃ。

殊に俺などは乱暴で、毎日々々近所から悪戯の言いつけの二つや三つ来られぬ日は無い、余程もてあましたものと見える。或る時、半日で好いから他所の子の様にあって呉ればいいと、俺を指して、つくづく歎息した事を今でも覚えて居る。

十三、四までは、実に迷惑のかけ通し、悪タレの仕通しをやった。子供の時分の、年の一つや二つ位年上の者は大抵コナシ付けて居った。

十七歳の時から、ズッと大きくなったが、その以前は身体は極く小さかった。頭許り大きくして、意地が又非常に良くなかった。

近所の子供が、俺の事を「百舌鳥」^{ヒヤクゼツトリ}「百舌鳥」とあだ名をつけて居った。親達の心配の程も考えられる。

父は、仲々細心な質であった、実に些細な点まで考えた。水も漏らさぬ程あれこれと、何事によらず心配した、非常に苦勞性の人であった。

しかし又、一旦過ぎ去った事は、決して彼これ云わなかった、即ち非常にあきらめもよかった。事に当っては、やる前には細かい気を配る、しかし配れるだけ配れば、後如何なる結果になっても、きつぱりあきらめて、一言も言わなかった。

同時に非常に儉素であった、一粒の飯、一片の反古も苟しくもせなかった。有用の事には家財を挙げる事も辞せなかったが、無用の費は深く戒めた。

儉素な、細心な、正直な、いい親であった。

俺の子供の時分は、どんな者になるだろう、大変な悪者になりはせぬかと噂された。

兄弟は又皆正直者じゃ、が、今でも、どうかいい方に向けてくれねばならぬが、と心配したと云う事を話しては笑うが、親達が揃った正直者じゃから、俺も根は正直に違いない。

俺の親達は、世間の何の親達にもさして劣らぬ、親としては実にいい親であったと思う。

俺の病氣

俺の病氣は胃じゃ、そう、もう大分古いものじゃ。二十何年も前に(のとき)、福岡に居る時、胃潰瘍をやった。熊谷玄且と云うものが、その頃一番と云われた医者じゃったが、俺の容態をみて到底むつかしいと云った。

橘養三郎と云うのが、やはり医者で、俺の懇意な人じゃったが、丁度、博多の油屋が同じ様な病で死んだ席で、熊谷と出会ったそうじゃ。すると熊谷が、「今度は頭山の番じゃ、もう長い事はない」と云ったと云う。橘が心配してやって来て「熊谷がそう云います」と云うから、「医者などが知るか」と云って置いた。その中に癒なごって東京に来ようと思つて停車場に行ったら、熊谷と会つたじゃ。大変肥えてね、太つて居たもんじゃから、「もう病氣はすつかり宜敷よかしいですか」と云つて、熊谷が不審がつて居た事があつた。

それから、又烈はげしいやつをやつてね(のとき)、咽喉には何も通らぬ。尻しつから滋養灌腸かんじょうなどやって見た。しかしそれもやめた。何を食つても皆吐く。



42 歳頃の肖像

それから、茶瓶ちやびんに氷を入れて来させて、それに水と塩をかきまぜて、座り直して、口から無理につかみこんだ、そして金盞かねざんを前に置いて吐いた。すると渋色の血の腐つたようなものが出た。よく幾度もやったらそれでやんだようじゃ、口も胃も馬鹿の様になつて感じがなくなつた。

食たべ物が少しとまるようになった。梅干と湯を解いて一服やつた。胃にとまった。二、三服やつた。

次にくず湯をやつた。それもとまった。それから大根を煮さし



51 歳頃の肖像

て食った。それもとまった。ばたばた直ったようじゃ。
後で板垣（医者）が来たから話したら、それは、コレラの時に食塩注射をするのを咽喉からやるんじゃからきく筈です、と云った。

覚えて居る程の事は

そう、俺に何かやったことを話せと云うから、「話したら一口じゃ、書いたら三行りみくだとは無いぞ、別段、覚えて居る程の事はした事がない」と云ったら、それぎり来なかった。

それを何か大分長く書き立てて居るそうじゃね、俺と玄洋社とか何とか云って。

俺の長い話は、皆嘘じゃ、頭山の序文などがあるものじゃ無い、そっち達が一番能く知^上って居ろう。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
直話集Ⅱ 一代回顧談
Snoshi-Shinsui.com

はしがき

獅子の口へ拳を突っ込む人、出来ない相談に乗って呉れる人、これが頭山立雲翁の特色である。翁は無位無冠にして、歴代の政府を監視し或いは随使して来た人でもある。私はこれを国宝的存在と信じている。で、私はかねてから、永く後世に残るべき翁の閲歴談を編むことを発意し、これを立雲翁に進言し、同時に翁の最も親近関係に立つ浜地天松居士に凶り、また頭山翁夫人及び令息立助君にも囑して、遂に翁の承諾を得、その一代の閲歴を作ることとなった。

翁自らいわく、「俺は無精者で、自分のことなど詳しい話をせぬから、自分のことを書いたものは大抵また聞きじゃろう」と。

そこで私は一言一句、翁の口唇を洩るるもののみを書き集めることにした。最初、こっちから話題を提供して一ヶ月もしたら出来上がるものと思うたのが、座上、客常に満ちて用談に忙殺され、かつ本来寡黙なる翁の事とて、翁一身上の談はほとんどこれを聴くの余閑なく、一年有半の間、翁の邸に日参同様にして、やっとこれだけの材料を得た。正にこれ、牡蠣の中から真珠を拾うの思いであった。それだけこれは最も貴重なる、立雲翁唯一の直話である。もしこれを敷衍したり、修飾したりしたら、一項目優に数十頁にもなりそうなのを、私は忠実に、翁の閲歴談をそのままに伝えて、その真面目を如実に現わし、一言一句の間に、機微なる点睛の妙味を示そうと努めた。翁の座談は、飾らずして巧みに天真流露を見る。以下翁の直話に移る。

(編者記)

*

これが自分の身の上話の初めてじゃ

私は無精者で、自分の事を話そうと言うて話した事はない。七、八年前、玄洋社の者が、書きたいから話をし
て呉れと言うたのを書かせなかった。これまで、雑誌や何かの本に出た私の履歴に關した話というのは、大抵復
聞きじゃろう。私の事を書くからと言うて断りに来たのはあったが、唯それだけの事で、私はそれに自身の事を
話してやったような事はない。私は何を書かれても構わん。唯天が眞実を知る。知己を天に求むるのじゃ。……
ま、そうじゃ。これが、自分で自分の事を語る初めてじゃ。

本を読む事は好きであった

本など読むことは、私は兄弟中一番好きで、記憶もよかった。先生の話は口うつしによくやったもので、輪講
をやると一番出来がよかった。三つ違いの兄に勧めて本を読ませた位だ。私の読書か？ 春秋左伝あたりまで
じゃったろう、外史や靖献遺言せいけんいげんのようなものは誰でも読んだのじゃ。父は放任主義で、自分を一番可愛がった。
私には何んの苦勞もなかった。

独りで淋しくない

そこで、わざと飯も食わんで、身を苦しめて見たり、山中へ入って仙人の稽古をするなんぞと、好んで苦勞を
して見た。側たはから見たら、私は浪人者故、不遇と思うだるうが、不満も不平もない。第一私は退屈するといふこ
とのない人間じゃ。独りで淋しくない。大がいの者は独りでは淋しがるが、私は何んともない。兄が今もいう。

「お前は子供の折から一人で淋しくないといったが、今にそうだ」と。

私はとにかく、生得しょうとく仕合わせに出来た。幾度も殺されるようなことをしても、自分がかすり傷も負わない。運

が強いというのじゃろう。人が心配をするような冒険に興味があった。

少時私の読書法

私の読書法は、気に入った処だけを肚へ入れるまで熟読したものじゃ。十八史略を読んで、禹が江を渡る処で、黄龍現われて舟を覆う条下で、禹王が泰然として、『生は奇なり、死は帰なり、龍を観る事、蝦蚺（りやも）の如し』とかある処で、

「これだ！」と考えてその時の禹王の心持ちになって見る。

また、項羽が始皇の巡狩の行列を見て、

「取って代わらん」と目をいからして進み出する処を読むと、

「これだ！」と、また項羽の肚になって、その勇気の勃々たる処を考える。項羽は快男子じゃ。事成らずといえども、男子として堂々たる一生じゃ。

己れは泣かぬ児であった

客「私が外国に居った時、その家の主人が旅行に出て細君が留守をする。夜になって、淋しいから、私に細君の室へ入って話でもして呉れと言います。私はそれはいかんというて、自分の室へ鍵をかけていると、細君は淋しいと言うて子供の様に声を揚げて泣き叫ぶので、驚き呆れました」

翁「世界中、泣かないのは日本人ばかりじゃろう。どこの国でも、大人が声を放って大いに泣くと書いて居るようじゃ。私は幼少の折、母に物をねだる時の外は、声を出して泣いた事はなかった。外では決して泣かなかつた」

俺の碁将棋は真剣だと強くなる

二度目の鹿児島入りの帰途じやった。川口雪蓬や、河野主一郎などに会うて来たのじゃ。その帰りに加治木へ立ち寄ると、道路から直ぐ見える店先の様な処で碁を打ち居る。私は立ち留まって見て居たら、何時までも見て居るもので、彼方で、

「お前さんは碁をやりますか？」と問う。

「お前達位は打てよう」というと、

「そんなら一お願いしましょう」というので、向こうが白を取る。

「田舎の碁打ちが、そんな我がままをするものでない」と私は叱って、「握りで行こう」という事にした。

私は白になって打つと、うんと勝った。二番やったが彼奴また負けた。口惜しがって、町で一番強いというのを連れて来たが、これも駄目じゃ。まるで相手にならん。

「あなた様は初段で御ざいましょう」という。私は加治木初段になった。

碁は十三歳の時、郷里で覚えた。近所の老人が毎日碁を打ち居るので習った。間もなくその老人を負かして、五ツも置かせるようになった。

後、玄洋社で、かけ碁をやった事がある。牛肉屋とやったのじゃ。元は士族で相当の人間じゃ。それが牛肉屋を開業して繁昌して居った。

「貴様が負けたら、玄洋社の者へ牛肉を御馳走せ」というと、

「宜しい」という事で、私が負けたら、自腹を切つて牛肉を買って皆んなに振り舞う事にしてやった。

平生は、この男は私へ五目置くのじゃが、

「今日は真剣じゃからせい目で来い」というて、せい目でやらせた。

「私が、不思議と私が勝つ。何度やっても私が勝った。私は、妙に真剣となると強いので、十七ばかりの時、賭け将棋をやった事がある。兄が他の者と将棋をさして居るが、どうしても勝てぬ。そこで私が代わってやった。私は兄よりも碁なら強いが、将棋はずっと弱いのだ。処がこの時、その者と対でやって勝った。彼方はどうしても勝てない。後に東京へ出て、総理など訪問の時でもそうだ。こちらは生一本の真剣で打つかって行く。何んのわだかまりもないから強い。彼方は何か胸の中に弱点があって、びくびくして居るようじゃ。賭け碁の時も、私は最初から覚悟を定めて、牛肉を皆んなへ奢るのじゃという肚でやると何んともないのじゃ。」

生まれながらのただくさ者

「私の豪傑修業か！」

何んにも修業はせん。生まれながらのただくさ者じゃ。無頓着に思うままを振る舞ったまでじゃ。先輩の激励だの鼓舞だのということもない、人蔘畑の塾へ行く前に、モウ私はこんな人間に出来上がっておったのじゃ。私が入蔘畑の婆さんの高場塾へ入ったのは二十歳ごろじゃった。そこには先輩格で宮川太一郎——今の宮川一貫の親父じゃ——それ等がおって、宮川は私に年は幾つだというから、二十だと答えると、

「何！ 戊辰ごろの二十歳だろう！」と宮川はいった。

宮川は私より七歳も年上じゃったが、私はそれと同年位に見えたのじゃろう。顔は老成していたのじゃ。一年下で、皆んなから苦しめられるべき方なのだが、そんな事で、一度も苦しめられなかった。宮川など身体も大きく力も強かったのじゃが、私を年下扱いにはしなかった。

仙人修業の三年

私の仙人修業は、三年ばかりじゃ。「大久保斬るべし」の覚え書きが役人らの手に入った為に、同志十余名と福岡の牢屋へ入れられる少し前まで、私は山へ入って仙人になっておったのじゃ。二十歳後の事じゃ。私の家の山じゃ。そこに番小屋のようなものがあつた。私はそこに寝て、何んにもせずに、仙人になるつもりでおつた。飯は炊いて食うが、それも面倒じゃと、七日位は食わずにいる。お菜は一年も通して梅干ばかり食うたこともある。延べ勘定にしたら、この仙人修業は三年位はあつたらう。

何んの慾もなかつた。美味しいものを食いたいなどいうこともなく、無慾恬淡の修業にはなつた。また艱苦に堪える修業にもなつた。独りでいて淋しくない方の修業にもなつた事じゃ。私は酒も煙草もやらず、女などの事は思いもしなかつた。死ぬるも生きるも同じように思うておつた。その中、世間が余りこたこたするようじゃから、仙人でも居られんと思うて、また山から里へ出て来た。それで矯志社というのを設けて、今度は世の中を改良してやろうという考えじゃ。する中に、「大久保斬るべし」の宣言書が見付かつて牢屋へ入れられた。十人ばかりの同志が挙げられたのじゃが、牢屋で苦しがるんのは私ばかりじゃつた。仙人時代よりはずっと気楽じゃ。懐手をしていて三度々々の御馳走が運ばれて来るし、梅干のお菜に比べたら牢屋の弁当は大した御馳走じゃ。それで大勢の仲間が一緒だし、風の変つた他の者も雑っているし、面白い倶楽部じゃ。とんと別荘にいるようなものじゃつた。

平野国臣と近藤勇

私は、直接誰の指導を受けんでも、間接には郷里の先輩の事など考えて発憤もした。平野国臣などの事は、よく知つて残念に思つた。平野は大いに遣れるはずであつたのが、時と処とを得ずして急にことを挙げて成らず、一敗地に塗れた事情など、実に残念じゃ。

「平野は二十人力の大男で……」などと、何時か本人を見たことのない者共が話しているのを聞いておかしかつ

た。

平野は小男の方で、小男の英雄豪傑も少なくないのじゃ。平野は一見温順であったが、なかなか武芸は出来たのじゃ。

何？……近藤男も小男じゃ？……否や、近藤はそうじゃなからう。先年盛岡で、知人の処で近藤男の写真を見たが、がっしりした立派な体格であったようじゃ。真剣になるとなかなか強いもので、平生の稽古の時とは別人の様に見えた様子じゃ。

有馬藤太が話に、

「近藤の前に出ると、その落ち付いた、研ぎ澄ました刃のような姿には圧されるようで、私も居堪まらなかった」といつていた。天成の剛胆者のように思われる。

平野などは、同郷の先輩でもあるし非凡な豪傑でもあったし、それがあんなことになったもので、私は残念に思っておった。その他にも越智（彦四郎）武部（小四郎）など、一期前の同郷の先輩がおった。また箱田（六輔）も年上じゃった。しかしこれらは、私が一人前になってから交渉を持ったので、少年時代にその感化影響を受けるといふようなことはなかった。私は昔から独立独立、一人で勝手に、持って生まれたままを振る舞うたまでじゃ。

（翁の長兄筒井亀喜翁も言われた、「満は幼少の折から変わって、いきました。あれは生まれながらの無頓着で、度胸者で、自制力も強く、断行力もあり、普通の人には出来ないことをやりました。頭山家の血統には、そんな類の豪傑風なのは更になるので、祖先以来あんな風の人間は一人も出なかったのです。誰の影響感化を受けたということもなく、生まれながらの変わり者です」）

平岡は行儀がよかった

福岡に居るころ、私は玉子焼というのを袂へ入れて食うて歩いた。平岡（浩太郎）は、博多織の羽織など着て酒

落っていた。英姿颯爽という風であった。兩人連れ立って行きながら、私は玉子焼を出して食う、平岡は、

「ころころ、そういうものはしまえよ」

と小声でいって留める。私は玉子焼を出して、

「貴様も食えよ、うまいぞ」

と突き付けると、平岡は聞かんふりして離れて行く。行儀がよかった。

江藤新平の拳兵

明治八年に江藤（新平）は佐賀で兵を挙げたが、事成らず一敗して同志離散し、潜行して土佐へ落ちて行った。もしあの時、土佐の議論が一致しておって、板垣や林（有造）などが団結しておいたら、或いは彼らは江藤を援けて立ち上がったか知れんのじゃが、それが出来なかつたので江藤も浮かばれんであった。気の毒な事であった。林勇造は、大西郷の拳兵に応じて起つだけの準備をしておったというので、片岡とは余ほど段違いの者であつたらしい。

正直者、前原一誠

前原一誠は、これも正直者で、大久保一派に反対して賊名を取つたことは可憫（かわい）なものじゃ（嵐の）。あれは明治九年の十月じゃ。その折、伯父さんかへ送つた手紙というのは、言々人を動かすもので、私は今でも暗誦している。それはこうじゃ。

「忠謀破れて賊となり、恨を呑んで九泉に帰る、実に畢生の遺憾なり。豊田の死生未だ知らず、憐むべきなり。僕等兄弟三人、実に心忠にして形賊なり。唯千載の公論を待つ。かつ僕等なお未だ死せず、千辛万苦、野に伏し山に伏し、北海の波に漂うて後図を謀らんと欲す。事遂げずして死せば天命なり、老兄幸いに我等

が心中を御賢察給わるべきなり。頓首一誠」

そうじゃ、私は地獄耳で記憶はよかったのじゃ。七歳の時、父と兄と一緒に扇屋という寄席を聴きに行った事がある。井伊大老が斬られた翌年で、桜田銘々伝を語っておった。私がそれを能く覚えて、帰ってから手真似までして話して聞かせて家の人を驚かしたことがある。

それから、前原が賊名を蒙る前のことじゃが、最初征韓論が成らず、木戸と合わずして朝を去る時の「辞」というのもあった。それも今に暗誦している。

「未だ弾丸矢石の間に出没せざる兇等、時に乗じて跋扈跳梁す。西洋事情を師として、専ら国勢を弄す。国家果たして富むべきか、兵力果たして強うすべきか、風俗果たして篤うすべきか、人民果たして安かるべきか。

我未だその停止する処を知らざるなり。我この輩と朝に在って国を売るの謗りを得んよりは、寧ろ勇退して後凶を成さん」

江藤でも前原でも、あのころ賊名を蒙った者は、正直者が多かった。

(翁の二十歳過ぎ、血気盛りのころには、九州が日本の本舞台の観があった。第一に天下の大立者、大西郷が征韓論敗れて後、鹿児島に退隠する、板垣は土佐に還る、江藤は佐賀に、前原は萩に引き込む。全国人の注意はこれ等の人々の上に向けられたのである。そのうち明治七年の二月、江藤新平先ず佐賀に乱を起こして失敗し、九年十月には前原一誠また萩に兵を挙げて失敗したのである。しかし薩南の健児は負隅の虎の如く大西郷を擁して控えているので、政府ではいよいよ神経を失らし、頭山翁一派の組織する矯志社の家宅搜索を始めた。すると社の盟約書の中にいろいろと過激な文字があり、殊に「大久保斬るべし」という一ヶ条があったので、これを証拠物として翁以下の社員一網打尽、投獄の身となった。)

私の獄中生活

私の入獄は、最初は福岡の牢屋で、西郷の戦争が始まると萩の牢屋へ移された。判決は受けず……そうだが、その未決のまま一年居ったのじゃ……そうじゃ、政府の方では我々が自由の身でいると何を仕出かさか知れんに依つて、囲いの中へ入れて置くつもりであつたらう。十人も同室へ入れて置いた。

その中に盗人が二人交つていてね、私の事を先生様といつておつた。彼奴がいうには、先生様が最初ここへお入りになった時には、余ほど腕の良い親分が来たと思ひました、というのじゃ。何んでも私の事を同じ盗人くらいに考えたのじゃらう。そいつなかなか利かん奴で、そんな悪人らしくもなく、役に立ちそうな者であつた。貧乏者へは恵んでもやる方の盗人であつたかも知れん。私共のいる間、卑怯な真似もしなかつたようじゃ。萩の牢屋では、私共は十人も同室じゃつた。その盗人の奴共が賭博をやつて、わっぱを賭けるのじゃ。飯を入れるあの曲者じゃね、わっぱというのは。すると、その負けた奴は、飯ごと、わっぱを取られて了う。取つた奴が私の処へ持つて来て、先生様に差し上げるといふのじゃ。他に楽しみもない牢屋で飯を取り上げられる奴が可愛想じゃから、そ奴にやれというのと、それでは折角の賭博が面白くありませんという。

入獄した同志は皆元氣であつたが、一人だけチブスに罹つて病死した。助からなかつたのじゃ。私は牢屋の中だつて退屈もせん、じつとしていられる。仲間が皆退屈がつておつた。……今に生き残つてゐるのは無いようじゃ。そのころの私はひどい生活をしていたので、牢にいる方がよッほど良い生活じゃ。平生は着物だつて汚れてゐるし、まずい物ばかり食つてゐる。無ければ何日も食わん位じゃつたから、牢屋にいる方が上等なのじゃ。

入獄中、母の訃音

その中、母親が死亡した。それで、私はわっぱは飯の上に載せてある魚を、そっくり仲間の奴へやつて、五十日ばかり精進をした。それから墓参りをする位の路程を測つて、毎日牢内を往つたり来つたり歩いた。病氣も何もせん。その前にも、何日も何日も飯の菜に梅干ばかりを食つたりしてゐた位で、牢屋は極楽であつた。

附録 頭山満先生

夢野久作

一

諸君は頭山満という老翁おじいさんの名前を、時々新聞で見たり、話に聞いたりされるであろう。同時にその頭山満という老翁おじいさんが大変に偉い人である事も知って居おられるであろう。

しかしその頭山先生が第一に「ドンナ風に偉い人か」、第二に「何様どしてソナ風に偉くなったのか」、第三に「どんな偉え大な事をした人か」と云うような事をハッキリ知っている人は余り無いであろうと思う。

ホントの事を云うと、そう云う筆者わたしも頭山先生の偉い処こゝを「から十のドン底まで知り抜いている訳では無い。ただ何度も何度も頭山先生にお目にかかったり、人の話を聞いたりしているお蔭で、普通の人よりもイクラか余計に知っているだけの話である。

ところで頭山先生の事を書く前に、何よりも先にお断りして置かなければならない事は、頭山先生が、諸君の知って居られる豊太閤とかナポレオンとか云うような英雄、豪傑えいなぞの偉え大ちさとは、まるで違つた意味の豪え大ちさを持つて居るのである……と云う事である。頭山先生の尊うんとい処こゝは東郷元帥、乃木大将、荒木大将なぞ云う人の尊うんとい処こゝと、いささか違っている……という事である。

それがドウ違つて居るかとか云う事は、これから先の伝記を読まれば自然とわかる事であるが、何よりも第一に大変に違つるところが一つ在る。それは外ほかでも無い。

SAMPLE
Shohei Shinsui.com

頭山先生以外の偉人とか豪傑とかの伝記を読んでいると、少年諸君ばかりでなく筆者自身のお手本になりそうな事がイクラでも出て来る。すこしでもいいから、そんな人々の真似を少年諸君がやって呉れるといいがなア……と思われるような感心な、立派なことが続々と出て来るのであるが、この頭山先生の伝記に限っては正反対に、少年諸君が真似をしてはイケナイ事がイクラでも出て来る。そこが、ほかの偉人豪傑と頭山先生の違うところである。

こんな風に云うと、「それならば頭山先生は悪いことばかりして豪くなつた人か」と諸君は早合点されるかも知れないが、決して左様では無い。

それならば何故頭山先生の真似をしてはいけないのか。そうして頭山先生は、そんな風に他人のお手本にならないような事ばかりしながら、どうして、そんな偉い人になられたのか……それは左に掲ぐる頭山先生の稚少時の逸話を読めばわかる。

頭山先生の幼少い時の名前は筒井乙次郎と云って、安政二年四月十二日に福岡市西新町の筒井亀策という人の第四番目の子供として生まれた。頭山という苗字はこの乙次郎少年が、後に頭山家へ養子に行つてから名乗つたものである。

翁の生まれた家は今でも福岡の西新町に在る。西新町の警察署に近い大きな楠木の立つて居る家がソレで、そこいらの人に聞くと叮嚀にお辞儀をして教えて呉れる。

翁のお父さんの亀策という人は元来、福岡藩の百石取りの馬廻役と云って、武士の中でもかなりの貧乏な家柄であつたらしい。お母さんの名前をおいそと云い一番の姉さんがおさき、その次の長男の兄さんが亀来君、その次が正次郎君という兄さんであつた。つまり乙次郎少年は一番末っ子の三男坊で、家中から「乙しゃん乙しゃん」と可愛がられて育つたものであつた。

ところがこの三男坊の末っ子の「乙しゃん」はだんだんと大きくなるに連れて、普通の子供と違つて来た。第一、とても腕白で家中の者の手に及えなばかりでなく、外へ遊びに出るとそこいら中の餓鬼大将になつて、自分よりもズツト年上の者まで輩下たがひに付けて、大暴れに暴れまわるのであつた。

そればかりでない。「乙しゃん」の腕白ぶりは、ほかの英雄豪傑連中の幼時の話として伝えられて居る腕白ぶりとは

非常に違った処があった。

「乙しゃん」は何処へ行っても、どんな事が起つてもボンヤリとしてヌーッとしていた。着物が汚れて居ようが、下駄が切れていようが、又は怪我をして血が流れていようが平氣の平左のクリクリ坊主で、鍛冶屋の店先へ突立って、何時までも何時までもトッテンカントッテンカンの音を聞きながら見惚れている。そのうちに飽きてしまうと何処かへフーッと行ってしまふ。近頃流行の言葉で云えば、「乙しゃん」は何処から見ても間違ひの無いヌーボー式少年であつた。

こんな事がある。

乙次郎少年が、まだ十歳にならない時分の寒い寒い冬の日の事であつたと云う。家の人から十銭のお金を貰つて菟藟を買ひに遣られた。その頃はまだ物の値段の安い頃の事で、菟藟なんぞは二、三銭も買えば山のように来る時代であつたので、多分五厘か一銭がトコ買つておいでと云われたのであろうが、向うの店へ行つて乙次郎少年がヌーボー式に黙つて十銭の金を出すと、菟藟屋のおやじが意地の悪い奴か何かであつたらう。氷のような水の中から十銭がトコの菟藟を数え出して、土間へ山のように積み上げた。そうして乙次郎少年を振り返つて、

「何か容物をば持つて来なざつたな」

その時分の習慣としては十や二十の菟藟なら藁へ突きつないで持つて帰ることになつたので、むろんソナに沢山の菟藟の、容物なんか持つて来ていなかった。

しかし乙次郎少年は驚かなかつた。相も変らぬヌーボー式に黙つて自分の着物の懐中を開いて、「ここへ入れて呉れ」と云う風に指して見せた。そうして菟藟屋の親爺がアベコベにビックリして居る眼の前で、その冷めたい冷めたい切れるような水だらけの菟藟を片端から自分の懐中へ摺み込んで悠々と歸つて行つた。「乙しゃん」のヌーボー式は馬鹿か豪傑かわからなかつた。

まだある。

「乙しゃん」が八ツか九ツの悪戯盛りの時代に、福岡県の嘉穂郡の山本と云う家に養子に遣られた事があつた。しかし養子に行つても自家に居つても、「乙しゃん」のヌーボーとした腕白はチットモ変らなかつた。ヌーッとしてボーッ

としていながら、何時、何処でドンナ事を初めるやらわからないので、山本家の人々は皆、驚いて閉口していた。

その山本という家の近所にお寺があつて、大きな柿の木があつて、お美味^しそうな赤い実がドッサリ実生^{みの}っていたが、その寺の和尚さんが八釜^{やつかま}しいので、近所の子供は怖^{おそ}がつて誰も喰^くいに行く者が無かつた。

しかし「乙しゃん」は平気であつた。毎日々々、真昼^{まひる}間から堂々とその柿の樹に登つて、手当り次第に柿の実を喰^くい散らすので、和尚が非常に腹を立てて、或る日の事、「乙しゃん」が柿の樹の絶頂に登つている処を見澄まして、柿の樹の下に忍び寄つて、大きな幹に両手をかけて力一パイゆすぶり出した。

しかし、それでも乙次郎少年は平気であつた。ニューツと木の空に立上りながら、左手でシッカリと樹の枝を握り、右手で前をまくつてシャアシャアと小便の雨を降らせ初めたので、和尚は坊主頭を抱えて逃げて行つたという。そんなアンバイで乙次郎少年が、あんまりヌーボー式に無鉄砲なので、山本の家でもトウトウ降参してしまつて、モトの筒井家へ送り返して来た。「乙しゃん」も平気な顔で、黙つてヌー、ボーとして歸つて来た。

とにかく、馬鹿だか豪傑だかマルキリわからないのが、乙次郎少年の特徴であつた。

筆者は少年諸君に「乙しゃん」の真似をして悪戯をして、ヌーボーとして貰^{もら}いたい為にこの話を書くのでは無い。後の頭山満翁になつた「乙しゃん」が、こうして生まれながらに底の知れないくらい気持の大きい、何が来ても、何と言われても驚かない、ヌーボーとした性質を持つていたことを知つて貰^{もら}いたい為にこんな例を引いてみたのである。

これは真似をしたとて何にもならぬ。真似はどこまでも真似でホンモノでは無い。

後の頭山満翁の「乙しゃん」は生まれながらにしてユンナ風に、底の知れないほど強い、大きい、シッカリした心を持つた偉人であつた。そうして、そのまんなにヌーボーと大きくなつて、上は代々の総理大臣から、下は日本中の生命知らずの壮士や無頼漢からまでも恐れ、敬^{おそ}われながら、自分がソレ程のエライ人間であることをチットモ知らないままに、普通の人間と同様に親孝行をして、老人や子供を可愛がつて、チットモ威張らないで弱い者の味方になつて来た人である。そうして自分でも自分のそうした豪^{えい}いとを何とも思わないまま、ヌーツとしてボーツとして八十幾歳の今日まで悠々と長生きをして来た人である。

だから頭山先生の伝記の中で、少年諸君が真似をしていい処はタツタ一つ、この「自分のエラサを知らないで、平々

凡々に忠孝の道を履み、他人に親切をつくして来た」という立派な心だけ……と云ってもいいであろう。

それを知らないで、ただ無暗にエラクなりたいたい、又はエライ人間に見せかけたいばかりの詰まらない人間が、われもわれもと頭山先生のヌーボーの真似をしたとて、頭山先生のようなエライ人間になれる筈が無い。

だから諸君はこの「乙しゃん」の真似をしたって駄目である。それよりも頭山先生のように自分の豪いところをチツトも豪いと思わない。心から平々凡々に神様を敬い、天子様に忠義をつくし、親孝行をし、弱い人間や、つまらない人間に親切をつくして行く方が早道である。そうすれば頭山先生とは違った、諸君の持つて生まれたエライ処が、それぞれ精一パイに世の中に現われて行くであろう。

この道理がわからなければ頭山先生のエライ処はわからない。頭山先生の伝記を読む必要は無い。否。面白がつて真似をするだけの目的ならば、この伝記は少年諸君に読んで貰わない方がいい位である。

ところで頭山先生の乙次郎少年は、そんな風に気が大きくて、ヌーッ、ポーッとしていた。馬鹿だか、弱虫だか、わからなかったたので、よく近所の腕白小僧連中がこの「乙しゃん」を馬鹿にしてイジメに来るのであった。

もちろん「乙しゃん」よりもズット年上の連中が多かったのであるが、しかし「乙しゃん」はビクともしなかった。平気な顔で自分を打ったり蹴ったりする連中の顔を、地ビタに寝ころんだままジロリジロリと見ている。泥だらけになっても、着物が破れても平気の平左で、怪我をしても瘤が出来ても痛いような顔一つしない。そうしてソソナ腕白連中が、いい加減に殴りくたびれ、イジメくたびれて引上げようとすると、今まで何の手向いもしないままヘタバっているかのように見えた「乙しゃん」がムックリと起上って、その腕白連中の中でも一番強そうな奴に向かって掴みかかるのであった。しかも、それが又トテモ落付き払ったシッカリした掴みかかりようで、腕力が底抜けに強い上に、蹴られても殴られても、喰い付かれてもビクともしない頑張りと来ているから、最前からクタビれている腕白連中は一も二もなぐ地ビタに押し伏せられて降参させられてしまうのであった。そうして一度降参させられたら、モウ二度と「乙しゃん」の前で頭は上らない。明日からみんな「乙しゃん」の乾尻になつてしまうのであった。

これは頭山満翁の子供の時分の話であるが、こうした「乙しゃん」の持つて生まれたエライ処は、今日になつても変っていない。

今の日本国中のドンナに豪い人物でも、どんなに乱暴なゴロ付までも決して頭山満翁を軽蔑しない。ニコニコしている翁に一睨み睨まれるとビクツとして小さくなってしまふのは、翁の子供時代から続いて来た、そうした威光に打たれるからである。「この人には敵わない」と一目で思わせられてしまふからである。

又、現在、頭山翁の乾兒と名乗って、翁の為に生命を棄てようとする者がドレ位、居るか分からない。インドや支那にまでソナナ人物が大勢居るらしいのであるが、そんなのは皆、翁の方から進んで喧嘩を吹っかけたり何かして恐れ入らせたのでは無い。向うから翁にぶつかって来て、恐れ入ってしまった人間ばかりであるが、それでも翁は知らん顔をしてヌーッとして居るのも、やはりそうした子供のエライ気象の続きに相違無いのである。

それから又、「乙しゃん」が一向に身なりを構わなかった性質も、その通りに今日の頭山満翁に残っている。

翁は自分の家が貧乏であるろうが、金持であるろうが、一向に構わない。誰から何を貰っても直ぐに人に遣つてしまつて明日喰べる御飯が無くなつても平気で居る。自分の家のお庭が荒れ果てて藪みたになつても、軒が傾いても、家中が雨漏りだらけになつても平気であるが、その代りに又、親切な人が来て立派な家を建てて遣つて翁を住まわせても、ただ心から「有難う」と云つたきり昔の通りにヌーッとして坐つてボンヤリしている。子供の時の通りである。

そればかりで無い。

「乙しゃん」が小さい時はナカナカ負けぬ気が強かつたと云う。

「乙しゃん」のお父さんは極く溫柔しい、当世の言葉で云うと「好いパパ」で、叱言などはチツトも云わない方であったが、正反対にお母さんの方はなかなか厳格な人で、子供たちは皆ピシピシとタタキ付けられながら「ハイハイ」と云う事を聞いていた。ところがタッタ一人末っ子の「乙しゃん」ばかりは、外で敗けない通りに、家に帰つてもお母さんに負けなかつた。泣きも笑いもしないまま、黙つてお母さんに刃向つて行つて、お母さんが五ツ叩けば六ツ叩き返すと云う風であつた。

もちろん、これは「乙しゃん」が極く幼少さい頃は無い時分の事で、こんなところばかり真似されては困るが、十一歳の一番上の姉さんのサキ子さんなどは、いつもこの幼少さい弟の「乙しゃん」に泣かされていたそうである。

真似されて困ることがまだある。

「乙しゃん」の生家、筒井の家では「買い喰い」なぞ云うことは、むろん両親から固く禁められて居ったので、「乙しゃん」の姉さんや兄さんたちは、決してそんな事をしなかつたのであるが、唯一人「乙しゃん」ばかりは平気であった。腹が減ると近所の菓子屋に行つて、店先に並べて在る菓子を黙って掴んで、喰いたい放題に喰い散らし、集まつて来る子供達に分けて遣つたりしたので、菓子屋ではソナ菓子の数々を通帳に付けて、時々「乙しゃん」の家へお金を貰いに来るので、両親は閉口していたという。

もちろんこの話だけ聞くとまことに痛快である。

「豪い人間になるには他所の店先のお菓子を黙って掴んで腹一パイ喰うに限る」とか何とか云つて、ちよつと遣つてみようかと思う少年諸君が居るかも知れないが、それは飛んでも無い話である。

そんな都合のよい処だけ真似をしたとて英雄豪傑になれるもので無い。そんな真似をしたならば、ソレは単なる「喰いしん棒の真似」と云うだけの事で、豪いことなんかチツトも無い。間誤々すると少年感化院に入れられるかも知れない。馬鹿々々しい話である。

「乙しゃん」は大きくなってからも、こんな風に負けぬ気が強かつた。それと一緒に、自分のしたいと思うこと、又はせねばならぬと思う事は、店先の菓子を掴むのと同様に直ぐさまグングンと実行に移して来た。

ロシアでも英国でも屁とも思わない。来るなら来いという気象を筒井の「乙しゃん」は生まれながらに持っていたのである。

同時に「乙しゃん」は、大きくなってから「この内閣は倒さねばならぬ」と思うたら、やはり店先の菓子を掴むように平気で爆弾でも何でも投げつけて、内閣を引っくり返してしまつたのである。

店先の菓子を掴むことは諸君でも出来るであろう。しかしソナ人真似をする様な卑しい根性の人間が、大きくなってから頭山翁のような傑い人になれない事は請合ひである。否。巡査に捕まつて懲役に行かなければ目つけものではあるまいか。

ところが、こうした「乙しゃん」の腕白が、どうした事か十三の時からピツタリと止んだ。多分「乙しゃん」が、何時までも小児の気持で腕白を突いているのが気まり悪くなったのであろう。打って変った親孝行者になって、よく両親の手助けなどをする様になったと云う話である。

これが又、普通の者にはチョット出来ないことである。前の菓子を掴む真似は出来ても、この真似はナカナカ出来そうにない。

どうです、少年諸君。年は十三でも十五でもいい。又は七ツか八ツでもいい。自分が悪かったと気が付くと同時に、正直に、ピツタリと今までの悪戯や、馬鹿遊びや、怠け根性をやめて、両親の言葉をよく守り、家の手伝いをセッセとする様になる事が出来ませんか。自分が正しいと思う通りに、自分の性質をサッパリと改める事が出来ませんか。

頭山先生のホントウの豪いところはこの心から正直な処に在るのですよ。

普通の子供は自分が悪かったと気が付いても、ナカナカ急に改める事が出来ないのだ。不正直にグズグズして居るから、とうとう一生涯つまらない人間で終るのだ。否々、十三や十四の子供ばかりでない。こうして自分の悪い処を直ぐに改める事の出来ない、意久地の無い人間は、四十になっても、五十になってもグズグズして、つまらない意地や習慣にこだわって、何の役にも立たない、他人迷惑な一生を送ってしまうのだ。

況んや吾が「乙しゃん」は、他人から訓戒されて腕白やヤンチャを止めたのでは無い。タッタ一人でジッと考えて、「俺はコンナ事ではイカンぞ」と気が付くと同時にピツタリと心を入れかえてしまったのだから、世間、普通の子供のように両親や、先生から叱られて、小さくなってしまったのと全然、訳が違っている。

私は断言する。頭山先生の豪いところが数多し中でも、この心から正直な点だけは是非とも諸君に真似して頂きたい。そうして諸君が万一、頭山先生と同様に、ビシビシと心を入れ換えて、グングン大人になって行く事が出来たならば、日本中は頭山先生に敗けない位のエライ人ばかりになって、日本は世界中を敵にしても決して敗けない……そうして世界から尊敬される、強い、頼もしい国になるであらう……と。

しかし「乙しゃん」は十三の年から大人になって親孝行を初めたとは云うものの、普通人と違っている処はドコ迄も

違っていた。

昔の貧乏な士族の家では、米を米屋に頼んで掲かせると、掲賃を取られるので皆、自分の家に臼と杵を置いて家族の人々が代る代るに掲いたものである。筆者なども米を掲いたので、その苦しさや辛さをよく知って居るのであるが、吾が「乙しゃん」は僅か十三やそこらで熱心にこの米掲ぎをやった。しかも普通の杵では軽くて駄目だと云うので、杵の中に穴を明けてその中へ鉛を入れて掲いた。その為に米が掲げ過ぎて臼の中で粉々になった……と云うのだから、その負けじ魂がドレ位強かったか、辛棒力が如何に無敵であったか、そうしてその腕力が如何にモノスゴかったかがわかる。

乙次郎少年が恐ろしかったのはその腕力ばかりでは無かった。その物記憶の良かったこと、慈悲深かったこと、物事に熱心で器用であった事などは、あまり人の知らない事ではあるが普通よりも遙かにズバ抜けていたらしいのである。

乙次郎少年がまだ七歳か八歳の頃、お父さんや兄弟たちと一緒に桜田烈士伝の講談を聞きに行った事があるが、帰って来ると間もなく一番小さい末っ子の乙次郎君が、その講談の文句を初めから終りまで順序よく記憶して居るばかりでなく、その烈士の名前までも一人残らず記憶して居ることがわかった時には、家中の人が皆、舌を捲いて感心したと言う。

これなどは生まれながらにしてステキな良いアタマと、物事を熱心に見たり聞いたりする心掛を持っていないと出来ぬ事である。慈悲深かった事ではコンナ話がある。

乙次郎少年が六ツか七ツ、兄さんの亀来君が十二歳ぐらいの時、二人で近所の川に鯰すくいに行った事がある。そこで兄さんの亀来君が、川の中から鯰をすくい上げて弟の乙次郎少年の持っている瀬戸物の鉢に入れるのであったが、乙次郎は、折角兄さんが捕って来た鯰を一匹一匹逃がしては喜んでるので、それを発見した兄さんの亀来さんが非常に憤って、その鯰の容物を地ビタにタタキ附けて粉々にしてしまった。

又、或る時、乙次郎少年が十五、六の頃、やはり兄さんの亀来君と、それから儀助という男と二人で鯰捕りに行っ

た。そうして二人で捕った鰻を筥の中に入れて乙次郎少年に持たせて居たものであるが、乙次郎少年はその紐の付いた筥を、わざと水の中で引きずって歩きながら、鰻をズンズン逃がしていた。その時に兄さんの亀来君は、弟の乙次郎少年が、物の生命を捕るのが大嫌いであることがヤットわかったと云う話である。

こうして乙次郎少年の憐れみ深い性質は、やはり今日の頭山満先生になっても変わっていない。誰でも頭山満先生と云うと、生命知らずの荒くれ男どもの総親分で、鬼でも蛇でもヒネリ殺して喰いそうなる人のように思っているが、決して左様でない。自分より弱いものや下手のものをイジめるのは大嫌いで、どんなに訳のわからない人間でも涙ぐましいほど親切にして遣るのが好きである。

ことに変わっているのは、どんなに悪い奴でも決して叱つたりイジメたりしない事で、見す見す頭山先生に嘘を吐いてお金を貰いに来ていることがわかり切つていても八釜しく咎めない。云う通りにお金でも何でも呉れて遣るのであるが、その人間が赤い舌を出して、約束も何も守らずに逃げて行つても、別に何とも云わないばかりでなく、又もや知らん顔をして同じような嘘を吐いてお金を貰いに来ても、やつぱり前と同じこと、

「おお。そうか。よしよし」

と云つて助けて遣る。つまるところ頭山先生の御恵は善人とか悪人とか云うものの区別は無いので、その頭山先生心の大きさは、敵も味方も一緒に育てる天地の心と同じこと……もしくは神様の心と同じことである。

「そんなに殺生が嫌いならば最初から魚捕りに行かない方がいいじゃないか」

なぞと理窟を云つてはイケナイ。黙つて跟いて行つて、黙つて逃がして遣る処に、乙次郎少年のエライ処があるのを諸君は最早、十分に察して居られるであらう。

誰でも真似の出来ない、又、普通の人間が真似をしてはイケナイ理窟以上、道徳や、法律以上にエライ頭山満先生の大きな心が、この話だけでもわかるであらう。

頭山満先生を尊敬せずには居られなくなるであらう。

